了してないのには呆れ果てた。

ことほどさように草創期は様々なトラブルも散見された。しかし、以降は順次大型望遠鏡が飛騨天文台に設置整備されてきて、現在の姿は隔世の感がある。歴史を重ねて益々発展することを願っている。

花山の想い出に寄せて

森山 茂
日本大学大学院総合科学研究科および日本大学生産工学部・教授

僕が山元龍三郎先生（当時、地球物理学教室・気象学講座教授）に連れられて、火星観測で高名な宮本正太郎先生を花山天文台の台長室にお訪ねしたのは、修士課程に進学して間もない学園紛争真っ直中の春盛りの候であったと思う。前年、気象学講座での学部卒研テーマとして「火星の気象」をやりたいと申し出、山元先生から文献を戴き、ひと夏信州の山村に籠もって、多くの火星気象学の外国文献を読んだ記憶が今となってはとても新鮮で懐かしい。市場競争原理や有用性などということに汚染されることなく、純粋に学問を、自由にやることに何の矛盾もなかったかつての青春の一時期である。

そのとき、宮本先生からどういうお話があったのかもう覚えていないが、想像していたとおり、穏やかな訥々とした話しぶりの中に山の隠者のような第一印象を持った。そのとき火星を研究しているという鳴海泰典院生を紹介された。それがご縁で、毎週木曜日午後の「惑星勉強会」に参加させて貰った。ヤブ蚊除けの蚊取り線香を焚いた花山の薄暗い地下室で、斎藤澄三郎先生を中心に、惑星研究の院生だった鳴海、岩崎、斎藤良一先輩諸氏とともに、多くの本や論文を読み合った。後に黒河氏も参加されたし、時に赤羽氏や平田氏も話題提供されていたと思う。

我々の研究の発表の場は主に、当時東京・駒場にあった東大・宇宙研での「月・惑星シンポジウム」であった。そこで、われわれの惑星気象学や観測の草分け的研究成果の発表の場を得るとともに、異分野の多くの他大学の研究者と交流できた。林忠四郎先生や永田武先生等々今となっては伝説的な先生方が現役で一堂に会して活躍されていた毎年のシンポジウムは、もはや後にも先にもない実に壮観そのものであった。

花山には、人にも建物にも多くの歴史を刻んだ“佇まい”というものがあった。年季の入ったあの花山の食堂で、宮本先生、服部先生を中心にして皆が揃って昼食や夕食を食べていた大家族的食事風景や、その食事作りをしていた稲田のオッチャンのことを今もぼんやりと記憶している。外様の小生も、あの花山の“大家族制”風景の一端に辛うじて幾度か参加していたのだと思う。ときに思い出したようにぼそぼそと話される宮本先生はやはり昔の大家族の皆の暗黙の中心だったし、もう一つの中心にはいつも色んな酒瓶が厳然として存在していた。セピア色のそんな懐か

しい、今となっては何か暖かい花山の原風景である。

山元先生の手土産だった大きな外国製缶入りコーヒーがきっかけで、当時全盛だったインスタントコーヒーに替わって、「コーヒーを入れる」作業が惑星勉強会でのコーヒーブレークの我々の楽しみに変わった。毎週、雨の日も風の日も、理学部構内から吉田山を抜け、真如堂を抜け、南禅寺疎水を通り、九条山から当時有料道路だった山道を登り、ずっと徒歩で花山に通った。それが実に楽しかったし、街の喧噪を離れて山道や森を歩きながら思惟できる僕の密かな幸せになった。その行方に天文台があった。

帰途、夜の山道から遠く眺めた悲しいほどに美しい京の街の夜景が、多くの生を行き過ぎていった花山の人々の顔とともに、滲んだように、言語論で言う「連辞・連合」として、今も僕の思考の底に沈殿していると思う。